

星翔の会

(せ い し ょ う の か い)

勝利を得る者に、わたしも明けの明星を与える。

(ヨハネの黙示録 2章28)

本年度も、新型コロナウイルス感染症の猛威が収まらず、本校の教育活動にも多大な影響を及ぼしました。とりわけ、皆さんの高校生活は、この感染症に翻弄され続けた三年間と言っても過言ではありません。

修学旅行や運動会等多くの活動が縮小あるいは中止に追い込まれるとともに、高体連・高文連行事は無観客開催での三年間となりました。これまで積み上げてきた成果を家族に現認してもらったり、自分で確かめたりする場も奪われる等努力が報われない場面に多く直面してきました。

今年の夏の甲子園では、仙台育英高等学校が初優勝。東北勢初の夏の甲子園優勝は大きな話題を呼びました。優勝が決まった試合後のインタビューでの須江監督は、選手にかけたい言葉として「入学どころか、多分おそらく中学校の卒業式もちゃんとできなくて。高校生活っていうのは、僕たち大人が過ごしてきた高校生活とは全く違うんです『青春って、すごく密なので』」との思いやり溢れる発言をされ、大きな話題となり今年の流行語大賞にもノミネートされました。まさに、高校三年である皆さんへのエールともいえる言葉であり、多くの人の共感を呼びました。

皆さんが中心となって活動した去年の生徒会活動も、文化祭の延期・記念祭バザーと生徒総会の中止等を余儀なくされ、従来の方法が全く取れない状況となりました。それでも、昨年度の生徒会スローガン「一星一花」、すなわち、「一人ひとりの輝きで一つの花を咲かせる」という思いを実現するために、コロナ禍でも実施できる活動を創意工夫しながら企画運営してくれたことに感謝しています。この三年間の逆境の中でも、一人ひとりの輝きで一つの花を咲かせてくれたことと思います。

こうした取り組みの経緯に加え、本校の象徴でもある「星」を重ね、卒業名を「星翔の会」と命名しました。

「星翔」の二文字には、卒業後、一人ひとりの輝きで咲かせた花を大きく羽ばたかせながら密なる青春を過ごしてほしいという願いといろいろな世界に羽ばたいて輝きながら活

躍してほしいという願いを込めました。

また、本校の校名の一文字と本校の校章にもデザインされている「星」をつけた卒業名です。これまで星のついた卒業名は、11期生「海の星会」と27期生「希望の星会」に続き、3期目となります。

「星」を付けた意味は、マリア様の生き方に倣い、それぞれの世界で活躍しながら、人々に今日を生きる力と明日への希望の光を与えることができるような人になってほしいとの願いも込めました。

「Women for Others」・五つの校訓とともに、これまで培った「自律」「而今」「命・怒・感謝の心」を大切にしながら、これからも、「星翔」の文字が示すように、1人ひとりが輝き咲かせた花を、それぞれの場で、大きく(高く)、羽ばたかせてください。そのためにも、「今」という時間を大切に生きることを忘れないでください。

一刻も早く、平和と希望に満ちた日々が訪れますように。

夜が明け、明けの明星があなたがたの心の中に昇るときまで、暗い所に輝くともし火として、どうかこの予言の言葉に留意してください。

※ 「この予言の言葉」…荘厳な栄光の中から、「これは私の愛する子、わたしの心に適う者」という声があって、主イエスは父である神から誉れと栄光をお受けになりました。

(ペトロの手紙 二 1章19)

何事も、不平や理屈を言わずに行いなさい。そうすれば、とがめられるところのない清い者となり、よこしまな曲がった時代の中で、非のうちどころのない神の子として、世にあって星のように輝き、命の言葉をしっかり保つでしよう。こうしてわたしたちは、自分が走ったことが無駄ではなく、労苦したことも無駄ではなかったと、キリストの日に誇ることができるでしょう。

(フィリップの信徒への手紙 2章14-16)

【ベツレヘムの星（クリスマスツリーの先端の大きな星）】

東方の三博士にイエス・キリストの誕生を知らせベツレヘムに導いた星

※ 東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。

(マタイによる福音書 2章9-11)

【マリ・テレーズ・ド・スピラン】

過去や未来ではなく、今の瞬間に全力を尽くすことです。